

短期研修報告書

受入機関：Kasetsart University Faculty of Veterinary Medicine (Kamphaeng Saen / Bang Khen)

作成者：獣医学群獣医学類 4 年 池田 峻輔

はじめに

今回の二週間（8月24日～9月7日）は、「実物に触れて学ぶ」「英語で伝え切る」を自分の課題として参加しました。日本では模型・シミュレーション中心の実習が多いため、タイの現場でエキゾチックアニマルを含む実践的な診療と運用を見学し、手順の“なぜ”まで身体で確かめたいと考えました。英語は上手さよりもまず恐れずに伝えることを最優先にしました。将来の三か月プログラム参加の判断材料にする目的もあり、この機会を最大限に生かしました。

第1週のまとめ

出発日は、空港の保安検査で機内持込のスプレー缶が容量超過で没収され、「規則は旅の一部だ」と肝に銘じるところから始まりました。到着後は、スワンナプーム国際空港のターミナル間連絡列車で構内を移動できることに驚きました。2日目は広大なキャンパスと象のクリニックに圧倒されつつ、英語での自己紹介を“うまさより伝え切る”姿勢で乗り切り、学内の設備見学で学びのスケールを実感しました。

3日目は終日エキゾチックアニマルに張り付きました。下痢のうさぎでは糞便から原虫オーシストを確認し、別個体で鼻涙管洗浄の手順を見学。腫瘍を抱えたオウムの注射、ヘビの経口投薬、CTで多卵を確認したカメの症例まで続き、どの場面でも「保定・鎮静→種別の解剖学→処置後の見守り」という流れが徹底されていると実感しました。午後は象の病院と猛禽ユニットを訪れ、骨折した象が厚いクッションで体幹を守られつつ天井のチェーンで部分免荷されている様子、猛禽の保温室がICUとして温湿度・酸素・照度まで管理されていることを確認（いずれも見学のみ）。珍しい症例が絶えず現れ、最後まで飽きませんでした。

翌日はバンコク市内の乗馬クラブで馬の管理と臨床を学び、装蹄周期や釘位置、蹄底清掃が予防の基本であること、常歩→速歩→駈歩→襲歩で微妙な左右差や着地音を拾う視点を再確認。元馬術部でも新発見だったのは、下顎の円運動で咬耗が偏り臼歯縁のエナメルポイントが生じやすい理由で、粗飼料不足や片側咀嚼、ビットの当たり、歯列不整がそれを助長し、適切な歯科処置が摂食と体重維持を安定させるという点でした。厩舎では送風で暑熱と粉塵を抑え、経済動物と伴侶動物で治療方針が変わることも体感しました。

週末前の金曜日は大学の動物診断センターで、PCRは温度サイクルで高い特異性や定量まで狙える一方で装置・時間コストが高いこと、RAAは約37~42℃の等温・短時間で現場スクリーニングに向くことを、アヒルサーコウイルスを題材に前処理からゲル電気泳動の確認まで通しで体験。コンタミ防止の単方向動線（抽出→調製→増幅→解析）も身につきました。現地の学生に英語で次々に質問でき、やり取りそのものが学びを一段深くしてくれた濃密な一週間でした。

第2週のまとめ

第2週は、「工程の目的をはっきり言語化する」を軸に進みました。月曜日のELISAでは、遮光・洗浄・22℃で30分といった条件の意味づけを一つずつ結び直し、間接法での一次／二次抗体の役割を確認しました。電気泳動はバンドの有無と濃淡の読み取りを再点検し、条件設定が解釈に直結する感覚を取り戻しました。翌日のアクアティックメディスンでは、生理（外温動物としての温度依存性）と管理（飼料係数、ペレット径、ろ過と紫外線殺菌、再循環式／通し水的设计）を対応させ、単一種養殖のリスク集中と複合・統合養殖の資源循環という考え方を腹落ちさせました。午後の農場見学では、ふ化から育成までの導線と清掃リズム、観賞魚の取り扱いを確認し、理論が運用に落ちている現場感をつかみました。

水曜日はティラピアの池内レースウェイ方式（IPRS）を見学し、歩廊からの手撒きで魚の食い付きに合わせて給餌量と投点を調整する運用、パドルホイールで流れと溶存酸素を作り静水域に残餌と排泄物を集める設計、魚体移送用シュートと大径配管の構造を把握しました。午後は化学合成農薬に依存しない稲作で、トリコデルマの種床づくりと物理的防除を見学し、「即効より定着」「工程を整える」という発想が水産と通底していると感じました。翌日の講義では、複合養殖の利点と単一養殖のリスクを対比し、緊急時の優先順位（まず溶存酸素、死亡個体回収、水質測定、部分換水と食塩）と「清掃→乾燥→消毒→再立ち上げ」の運用を整理。「病魚対応」は水を直し、履歴聴取と観察で仮説を立て、目的に合う最小限の検査で根拠を固め、必要最小限で介入するという順番を、ケースベースで自分の頭で考える形式で身につけました。

週末は拠点のカンペンセンからバンケンへ移し、英語発表でこれまでの学びを総括しました。出来には悔しさが残った一方、修了書を受け取った瞬間の達成感は大きく、次は構成と表現を磨こうと前向きになれました。大学動物病院では献血と血液製剤の運用を見学し、今回の施設では猫は主として全血で短期運用、一般論としては赤血球製剤や凍結血漿の保管も可能であること、血小板は保存が難しく必要時に新鮮全血が選ばれやすいことを理解しました。水中トレッドミルや深いリハビリプール、移動手術車など、人の医療に匹敵する設備も確認し、「設計して運用する」という2週目のテーマが臨床現場でも貫かれていると実感しました。

交流・生活

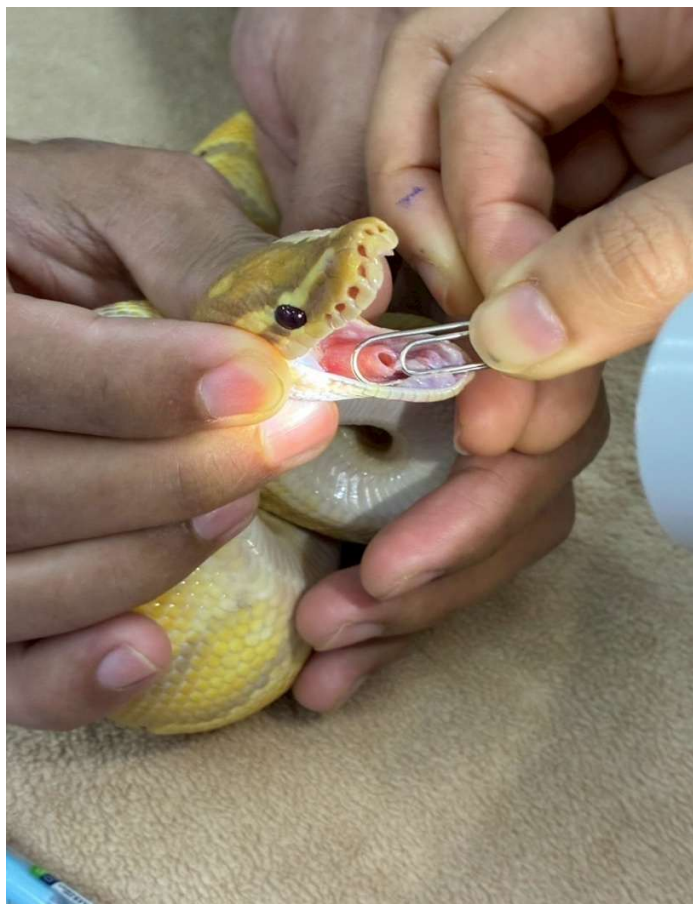
放課後はタイ人の友達に連れられて屋台やローカル食堂を回り、ムーカタ（豚肉の鉄鍋料理）やタイ式のすき焼きをはじめ、マンゴースティッキーライス、ガパオライス、カオマンガイ、麺料理まで幅広く味わいました。辛味は全体に強めでしたが、もともと辛いものが好きなので毎食が楽しみでした。注文は英語を基本に、友達が辛さの調整や作法をサポートしてくれて心強く、教わった簡単なタイ語も少しずつ試しました。学内では学部対抗スポーツフェスティバルの応援に参加し、会場の一体感と活気を肌で感じました。第1週末は王宮（グランドパレス）を見学し、第2週は渡し船でワット・アルンへ。買い物は第2週に JJ Mall（チャトゥチャック）と MBK センターを回り、スクールに打たれたり値段交渉に挑戦したりと“生活のリアル”も体験しました。こうした食と移動、学内イベント、現地の人との関わりが、教室の学びを日常と結び付け、自信につながりました。

まとめ

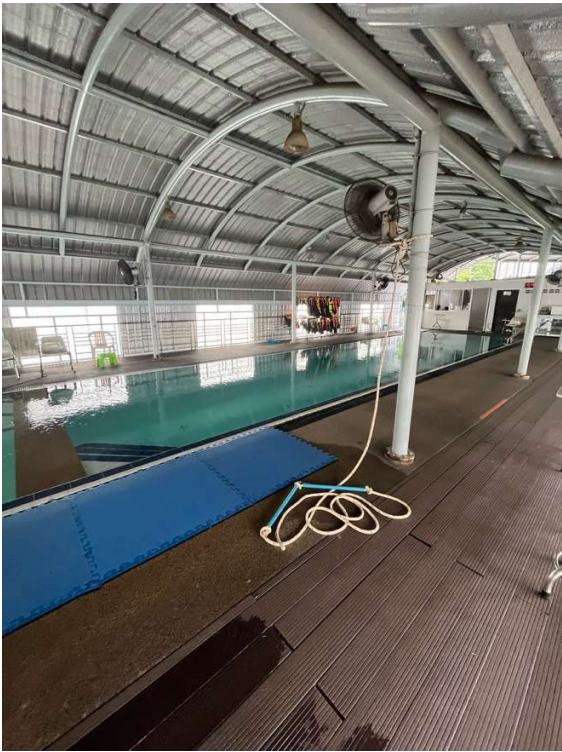
二週間は学びに満ちた充実の時間でした。核は「手順と目的を結び直すこと」です。ELISA では遮光・洗浄・時間と温度・対照の意味を自分の言葉で説明できるようになり、養殖では温度・溶存酸素・飼料・ろ過を清掃や水流、給餌設計へ落とし込む視点が定着しました。エキゾチックアニマルでは保定・鎮静・解剖学的注意点・処置後の見守りという共通の骨格を掴み、対象が変わっても応用できると実感しました。馬の臨床では装蹄、歯の調整、歩様観察、厩舎環境という予防の柱を具体化できました。英語は上手さよりも恐れずに伝える姿勢が最も大切で、簡潔な表現でも十分に協働できることを体験しました。学びを支えてくださった先生方や学生の皆さま、現地で助けてくださった多くの方々に深く感謝し、得た視点を今後の学内実習と将来の臨床に生かしていきます。



ウサギの鼻涙管洗浄



ヘビの経口投薬



↑バンケンキャンパスの動物病院にあるリハビリプール

↓ティラピアの料理



タイのお友達と食べたタイ式のすき焼き



向こう岸から見たワットアルン





ヤギの頸静脈からの採血



ELISA 試験でのマルチチャンネルピペットの操作



カンペンセンキャンパス内の野犬